

## 淨土教的實踐の問題

— 證空師の行成論の示唆によつて —

藤原幸章

およそ信仰の問題は實踐をはなれては考へられない。

それはつねに我々の主體的な體驗に於いて現實に實踐せられ生活せられるべきものである。實踐によつて宗教は眞に活きた生命を得、具體的に形成せられる。信仰の問題が、古來の眞劍な求道者達によつて常に實踐を通して捉えられ考へられ來つた所以はこゝにある。然るに、かくの如き宗教的實踐は嚴密には二つの面から成立するものと考へられる。即ち一つは救濟の體驗の直接的表現としての出世間的な實踐であり、他の一つは信仰經驗の世俗一般への表現として考へられる世間的な實踐である。

前者が禮拜とか讀誦とかいふ如き個人的内面的な實踐として捉えられるに對して、後者は我々の歴史的現實と直

結する社會的外面的な性格をもつものといつてよい。されば具體的な我々の信仰生活は、かくの如き二つの實踐を内につむむことによつて豊かに展開するものといはなければならぬ。いまこゝに我々がとりあげやうとする淨土教的實踐の問題とは、このうち後者の場合に於ける實踐についてとあつて、つまりそれは淨土教的信仰の社會生活一般への結びつき、淨土教徒の現實活動についての問題である。

この意味に於ける淨土教的實踐の問題は古くしてしかも新しい問題である。法然聖人の吉水教團に投げかけられた舊佛教側からの論難乃至は一般社會からの批判の焦點が既にこの問題に於いて見出されること(例へば、『興福寺奏狀』の第八失「損釋衆失」に於いて、吉水教團の反世俗的、反社會的な數々の罪狀を記録してこれを

結ぶに、「奏聞の旨趣主として此にあり」と奏狀の主題をまつたこの問題においてゐることは、この場合特に注目せられるべきである。又、原始眞宗教團内部に於ける造悪無碍や本願ぼこりの異計等の問題、更に列祖をはじめ有力門弟によつて制定せられたと見做される、諸種の禁制・掟等によつて反顯せられる眞宗教徒の反社會的・反倫理的な行動等々、まことに淨土教徒の歴史は一面からいへばこの問題に對する轉落の歴史であつたといつてもよい。殊にこの問題が我々の歴史的現實に於いてかへりみられるとき、正にそれは焦眉の急を以て我々にその抜本的な解決を迫りつゝある。いまや講和の成立に伴つて國民の確固たる道義的社會的實踐の指標が世界史的立場に於いて眞に要請せられつゝあること、又、所謂新興宗教の一群が特に現實的實踐といふ武器をもつて日夜に我々の牙城に迫りつゝあること等、我々をつゝむ環境は全くこの問題の火急的根本的解決なくしては、一としてかへりみらるべきものなしといはねばならない。否、それよりも更に重要なことは我々は人間として、又淨土教徒として我々の歴史をいかに眞實に生きるべきであるかといふ本質的な問題が問はれるとき、この問題の眞の解決こそ眞劍に考へられなくてはならない急務であるとい

ふべきである。かくして我々はいま眞に我々のよるべとするに足る現實的社會的實踐の指標と原理とを、淨土教的信仰の中に明らかにしてゆくといふ嚴肅な不可避的な課題の前に立たされてゐる。恐らく今日程潑刺たる淨土教徒の現實活動がきびしく要請せられるときはあるまい。勿論信仰的世界に於いては、世俗的でないとなみの一切をしりぞけて出世間的實踐に徹することが、何にもまして重要な比重をもつ本質的な問題であらう。然しながら我々の信仰が眞實である限りそれは單に個人的内面的のみ奥深く靜止する筈のものではなく、必ずや外的社會的に潑刺と躍り動くべき筈である。淨土教徒と雖も人間である限り、常に歴史的社會的であるといふ人間存在の根本構造をはなれることは出来ない。従つて人間は一面に於いて所與の歴史的社會的環境にとゞまりつゝ、而も他面常に歴史を創り社會を創りつゝあるといふことは我々の場合にも妥當する。我々のゆるぎなきまことの信心は、我々をして新たな創造へと押しすすめずにはおかない。「眞實信心必具名號」<sup>①</sup>といふ宗祖の體驗は、既にこの方向を我々に指し示してゐることとくである。我々は單に内面的な信心にのみとゞまらず、すゝんでこの中から我々の現實活動への強力な跳躍板を見つつけ出してゆ

かねばならない。かくして我々に課せられた即今の急務として、浄土教徒の現實活動に對する積極的な教義的基礎づけの問題が提起せられる。

しかしながらこの問題は「幾度も廢立を以て先と」<sup>①</sup>して純粹に出世間的實踐に徹底する眞宗教學にあつては、當然多くの困難な問題を伴うものゝ如く、従つてそれはあらゆる角度から綿密に且つ慎重に考へられなければならぬ。我々がこの小論に於いて述べやうとすることは、既に到達し得た結論についてではなく問題解決への一つの出發點乃至は緒口を見つけやうとするものにとゞまるものである。しかしてこの方法として法然門下のすぐれた人師として名高い善慧房證空師の浄土教學をかへりみることによつて、そこに問題解決への一つの示唆を求めやうと試みるものである。

註① 『信卷』御自釋二六

② 『改邪鈔』末一六

③ 浄土宗西山流祖治承元—寶治元(一一七七—一二四七)

## 二

信仰の第一義はすべての人生的なるものに死んで彼岸的なるものに生きるところに見出される。従つて宗教的

世界に於いては、世俗的人間的な行爲の一切が非價値的な雜毒虛假の行としてきびしくしりぞけられる。一般に宗教的實踐が先づ現實否定のかたちに見出される所以はこゝにある。「世間は虛假なり。唯佛のみ是れ眞なり」<sup>①</sup>といひ、「煩惱具足の凡火宅無常の世界は、よろづのことみなもてそらごとたはごとまことあることなきに、たゞ念佛のみぞまことにておはします」<sup>②</sup>といふのは、かくの如き宗教的實踐の本質的構造をもつともするべく表明したものといつてよい。殊に「娑婆の外に浄土を立て」<sup>③</sup>、「穢を捨て淨を欣」<sup>④</sup>うといふ本質的な教義構造の上に立つ浄土教に於いては、この傾向は甚だしく顯著である。されば我々の急ぐべきは先づ信仰の第一義に徹することであり、従つて我々の實踐は何よりも現實否定的な出世間的實踐にすゝむべきであらう。このことは善導が「三界は安きこと無し。火宅の如し……去來他郷には停る可らず。佛に従ひて家に歸せよ」<sup>⑤</sup>といひ、又、かの『數異鈔』が聖道教的實踐に對する浄土教的立場を比顯して、「浄土の慈悲といふは、念佛していそぎ佛になりて大慈大悲心を以ておもふがごとく衆生を利益するをいふべきなり。……しかれば念佛まうすのみぞすゑとをりたる大慈悲心にてさふらふべき」<sup>⑥</sup>とまで主張すること

によつて明らかである。されば淨土教的世界にあつては、眞實なるものはたゞ念佛一行のみであつてその他の一切はそらごとたはごとである。たとへ善の名が與へられたとしても、それは雜毒の善であり虚假の行にしかすぎない。従つてかくの如き我々にしては、有情利益や現實的實踐の如きは思ひもよらないところであるといふべきであらう。この故に他力淨土教の歴史に於いて、多くの場合出世間的な現實否定の實踐が重んぜられ來つたことは一應正しい態度であつた。然しながらまたそれゆゑにこの教に於いては、信仰の世俗一般への結びつきが極めて弱く、現實社會の諸の邪惡に對してすゝんでこれに挑戦する勇氣を失ひ、屢々これと妥協的ですらあつたのである。かくして「現世はとてもかくても後生ばかりたすかれ」<sup>7)</sup>ば、その他の一切は不要であるとさへ主張せられやうとする。されど我々はいまやこのやうな淨土教的偏向をそのままに見送ることは斷じてゆるされない。この意味に於いて證空師の所謂行成論の主張はこの問題に對して我々の注目すべき積極的な示唆をなげかけるものといつてよい。されば我々はこゝに先づその主張を聞かうと思ふ。

周知の如く法然聖人の吉水教團には多くの偉器偉材が

輩出し、しかも宗祖の教學に對して尠からぬ影響力をもつたと考へられるものが少くない。いまこゝにとりあげやうとする證空師の教學は、宗祖のそれに對して直接にはどれ程の影響を投げたかは明確な史實の徴すべきものがない。<sup>8)</sup>然るに親鸞・證空兩師の教義表現の結果をかへりみると、その共通性の著しいものゝ存する事實は正に瞠目に値ひする。(例へば自力の徹底的否定と他力の高揚、信心の強調、救ひの現實的體驗、報恩の思想等)殊にその門流の教學に至つてはながく眞宗教學に對して多くの示唆と暗示を提供し來つたことは、我々の歴史が明らかにこれを證明するところである。<sup>9)</sup>このことは證空教學と親鸞教學とが、その基底に於いて共通の信仰意識につながり頗る近似した世界觀に立つ結果であると考へられる。

然らば證空師はどのように考へ、どのやうに主張するのであらうか。師によれば、淨土教徒はその他力信仰の必然として強力な現實的實踐に動かなければならないし、又おのづからこれに押し出されてゆく。しかもこうした實踐の一切は、念佛行として他力信仰の枠内に於ける潑刺たる現實活動であり、従つてそれは淨土の行として明確な方向をもつ淨土教的實踐であるとせられる。さ

れば師の教學は、捨此往彼を標榜する淨土教がともすれば陥らんとする現實否定的な非活動的な教義的盲點からたくみに身をかはし得て、頗る世間的現實實踐的な生彩に溢れてゐる。虚心にこれを見るときは、寧ろ他力淨土教の限界を超える危険すらもつものと考へられる。師の教學體系に於いて一般に「觀門論」とか、「正行論」とか、更に「衆譽法門」とか呼ばれてゐるものゝ教義内容が即ちこの問題を體系的に組織づけてゐるところであつて、この小論の副題にかゝげた「行成論」とは、これらの多様な稱呼によつて表はされる獨自な師の教義的立場を總稱するものと考へて差支へない。

一般に知られてゐる如く、師の教義表現の方法は必ずしも一定の單一的な表現形式をとらず、ときとところに応じて頗る自由な表明が企てられてゐるのであつて、それは所謂西山教學に於ける特殊名目として著名である。いふところの特殊名目とは、師の教學に於ける重要な教義表現の範疇的役割を荷ふものであつて、その一〇〇巻に餘る龐大な著述は個々にこれを異らしめてゐるところである。師はこれによつて自己の懐く體驗的世界を最も嚴密に表明せんところざしたものであることは疑うべくもない。けれどもそれは餘りにも繁雜に過ぎて、却つ

て師の教學の正當な理解に大きなマイナスとなつてゐることも亦疑はれない。蓋しかくの如き多様な表現様式をもつ特殊名目は恐らく師自身の信仰體驗の推移・深化に即する個々の表現であつて、そのほかの格別な意味をもつものではあるまいと考へられる。こゝにいふ所謂「行成論」の主張にあつても、その内容は上述の如く多様な表現によつて祖述せられてゐるのであつて、「觀門論」が主として『觀門要義鈔』に於いてみられるに對して、「正行論」は『他筆鈔』に、又更に「衆譽法門」は事相部の諸典に用ひられてゐるところである。しかも、それのもつ意味内容はその表現の多様性に應じて少しづつ動いてゆくのであつて、これらの正確な把握には可成りの困難が感ぜられる。然しながら觀門といひ、正行といひ、衆譽といふも、大體に於いてその教義的立場を一にし、その狙ひを同じくするものと考へて差支へない。これ右の如く多くの表現をもつ師の獨自な體驗的立場が、敢て「行成論」の名のもとに包括せられる所以である。

註① 『法王帝説』佛全一一二の四六

② 『歎異鈔』後序

③ 『曼荼羅註記』西全二の一三七

④ 『教行信證』總序

- ⑤ 『法事讚』下二五  
 ⑥ 『歎異鈔』第四章  
 ⑦ 『明惠上人』法語篇一五三「あるべきやうは」  
 ⑧ たゞ法然の『七箇條起請文』に共に連署し、又かの承元の法難に際して共に連坐せること『歎異鈔』の奥、及び『法水分流記』等に記録するのみ。年齢的には親鸞の證空に長ずること五年。法然の膝下に同室すること約七年に及ぶ。

⑨ 覺如の『口傳鈔』中卷に傳へる「體失不體失の往生」をめぐる親鸞對證空の諍論は別に考へるべきものと思ふ。  
 ⑩ 覺・存二師が親しく證空の門下、東山義觀鏡の資、阿日房彰空に師事して淨土教學を學んだことは、『敬重繪詞』『一期記』等につたへるところであり、それ以後平生業成・機法一體・一代結經等の重用な教義表現の用語が眞宗の聖典に登場すること、特に覺如の『執持鈔』終りの「根機つたなしとて……」の法語の如き、全く證空の法語『鎮勸用心』に做ふものであること等々に於いて明らかなるところであり、更に「文は傳通記により義は楷定記による」といはれる徳川期の眞宗學僧の傳統的な異流教學に對する態度に於いても、『楷定記』によつて代表せられる西山教學が眞宗教學に對して、特に多くの教義的示唆を與へた事實が暗示せられてゐる。

## 三

然らばいふところの行成論とは如何なる構造をもち、

それは我々の主題に對してどのやうな示唆を投げかけるものであらうか。

證空師の行成論の主張はその據るところ『散善義』三心釋の結文「三心既具無行不成」に求められてゐることは、疑ひもないところである。即ち師はこの疏文を解して次の如くいふ。

「三心既具従り下は、上に三心の義を釋し已りて、正しく彼の心の機能を釋し顯す也。……無行不成と者、解は行を淨むる故に、三心の悟り既に備はりぬれば、行業必ず成すべしと云也。其の行の體は阿彌陀佛の四字を、往生の正行と意得つれば、一切の諸の行業、皆往生の教行に非と云こと無しと心得る故也。」

「三心既具とは能成也。三心正因也。無行不成とは、所成也。三福也。……領解の心九品に互る正行の道理也。」

「三心開悟して佛願に歸する時、定散能詮の謂、行成の義成る也。所謂、三心既具無行不成と釋する此の意也。」

「安心既にたちぬれば、起行疎からず。觀經の意を以て三心の意得つれば、行として成ぜずと云事無し。故に廣く一切の行も成す可き理り有り。」

こゝに見られる師の最も顯著な主張は、信心に於ける鮮かな價值轉換であり、積極的な轉身である。つまり師はこの疏文に於いて、我々の信心が單に稱名行の成立根據たるのみに止らず、進んでそれが廣く世出世の一切善根まで淨土の行として價值轉換するべき基底であるとす。従つて師に於いては、疏文にいふ「三心既具無行不成」の「行」とは、廣義の宗教的實踐を意味するのであつて、單に稱名行のみに限定すべきではない。そこには禮拜や讀誦等の如き出世間的な行は勿論、我々の世間的現實的な實踐も亦淨土教的實踐に含まれるとするのである。『散善義他筆鈔』に今の疏文を解して、それが特に善導の唯願無行別時意説の論難に對する辯駁に外ならぬと論じて、次の如くいふものはこの場合特に注目せられなければならない。

「三心既具等者、此の釋意は、正く發三種心即便往生具三心者必生彼國と説く文義を明して、外邪異見之難を防ぐ也。……今師（私註善導）解して云く、此の三

心は唯願に非ず願を行に具する位、無行不成の謂を成立する也。願行既に具して何ぞ是れ別時ならん。但し此の行成の義に異に善に作る兩異本に重有る有り。至誠と深心とは歸命を體と爲す。廻向心も又南無の義也。此の三心

の所歸は本願の名號也。阿彌陀佛者即是其行と云り。即ち他力の行、萬行の總體なるが故に、稱ふれば無行不成也。將又、此の能歸の心、即ち廻向の義の中に、自他凡聖の世出世の善を兼て、廻向發願して願生するが故に、無行不成也。」<sup>⑤</sup>

かくして要するに行成論とは、信を媒介とする一切の價値の再發見であり、よみがへりであるといふことが出来る。蓋しかくの如き主張は證空教學を特徴づける最も特異な主張といふべく、師によれば凡そ善の本質そのものは絶対であつて、本來法爾として眞如阿彌陀佛の功德の顯現ならぬはない。<sup>⑥</sup>さればそこには本來雜毒の善もなければ、虚假の行もあるべき筈がない。然るにそれが一度人間的立場に引き降されるや、忽ちにして雜毒虚假に轉落する。善導が不眞實の行としてきびしく退けるものはこの轉落の善であり、法然が自力として否定するものはかくの如き絶対善を人間的相對界に引き降さんとする我々人間の我執を意味する。されば若し我々にしてかくの如き自力の我執をはなれて本來的な絶対善の本質を領解すれば、そのとき忽然として新しき地平が拓かれる。そこには最早退けらるべき何物もなく、一切がそのままにして絶対善の顯現たらぬはない。蓋し「善體本妙」<sup>⑦</sup>で

あつて、それは本來真如そのもの、顯現であり阿彌陀佛の功德と直接する。従つて「善の體は嫌ふ所」なく、眞實不眞實の堺畔は一にかゝつて我々の「心の開不開に依る」とせられる。しかしてかくの如き善の本質的構造を如實に認識し把握することこそ三心であり、一心であり、示觀領解の心であり、更に觀門の智でもある。即ちこゝでは、信心に於ける一切の價值轉換が最も鮮かにうごいてゐるのであつて、三心といふも一心といふもまた示觀領解の心といふも、所詮かくの如き轉換の契機そのものにほかならない。この故に「三心領解の心に入らざる之定散は、雜毒虚假の行と嫌ひ、領解の心に入れば、雜毒虚假の謂ひ無し」とか、「三心具しぬれば、三世の一切の善根、皆悉く眞實の善と成る故に、往生の業と爲る所を輕しめず、深く隨喜の心を發す也」とかいはれ、又更に「眞實の信心に住しぬれば、一切の善根、皆悉く其の體別ならず。弘願に相應して一善も漏れず往生の因と成る」と主張せられる。かくして師にあつては信を契機として我々の三業起行の一切がそのまゝに肯定せられて、曾つては雜毒として退けられたすべてがよみがへり、一善一法も「彌陀所有の功德」ならざるはなくすべてが弘願念佛海中の波動として他力念佛行中につままれる。か

の二河喩の「廻諸行業直向西方也」の疏文を理解するに、「一切の行業は觀門の故に、皆弘願の念佛に歸して往生すると言ふことを顯す也」といひ、更に三心釋結文の「願行既成」を解して、

「願行既成と者、願は三心を惣たる名也。行は一切の諸行念佛の一行に歸して、唯阿彌陀佛の四字と成る一行也。然らば願は南無の義に成り、行は阿彌陀佛に收まる。詮は南無阿彌陀佛の六字と釋し顯して、決定往生の義を釋し成ずる也。」

とか説くものは、單に上來の所論を結ぶものとしてのみならず、證空教學に於ける獨自な念佛論として特に注目しに値いする。

かくして師の謂ふところの念佛は單に稱名念佛のみを意味するに止まらず、「三業に起す所の行を念佛と云ふ也」との所謂通三業の念佛として限りなきひろがりをして展開するのであつて、かくの如き念佛論なればこそ、その宗教的實踐は亦無限のひろさをもつこととなるは當然のことであらう。勿論師といへども、善導法然の教義的立場を特徴づける稱名念佛の絕對性を否定するものではない。それどころか師の教學は常に他力稱名の價值づけをこゝろざしてゐるのであつて、名體不二の論理に基



く離三業の念佛論や、非定非散の白木念佛論をはじめ、こゝにいま我々がとり上げた行成論の主張そのものも亦その基底に於いては念佛論の完成を目指した善意の企てであると考えられる。實に師の三業念佛論は、極めて大膽に極めて自由に組み立てられてゐるのであつて、ここでは我々の三業起行の一切が眞如自體の顯現として阿彌陀佛の功德に直接せる絶對善であり、すべての人間的立場をはなれた他力の行であるとせられる。かくの如き主張は單に我々の實踐行について語られるのみに止らず、諸佛諸經の教行は勿論、廣く森羅萬象事々物々に迄及ぼされて、遂には一切が擧げて他力淨土教の價値内容と轉ぜられる。「觀門廣ければ、弘願彌よ成ず」といひ、「娑婆の外に淨土を立て、且暮朝夕に南無西方極樂世界と禮し、經を讀み、御名を稱へ、華を供へ、香を燒き、施を行じ、人を助け、路を造り、橋を亘す。皆悉く娑婆を出でて極樂に入らんが爲」の淨土教的實踐とせられ、又かの名高い「山の三角も彌陀三尊、松吹く風も聖衆來迎の聲」といふものは、師に於ける行成的世界の頂點を示すものといつてよい。所詮師にあつては我々の生そのものが弘教他力眞如海中のいとなみであり、従つて世界成立の原理も亦こゝに求められてゐるのである。

蓋しかゝる考へ方のよつて來るところは、上來屢々指摘した如く信心に於けるするどい價値轉換に求められてゐるのであつたが、このことは師の『觀經』理解が常に定善示觀緣に於ける所謂草提の示觀領解に出發點を置く事實をかへりみれば、更に明らかなるところである。しかして師がかくの如く特に草提の示觀領解を重視する所以のものは、師の淨土教學が徹底的に『觀經』一邊倒の教學でありつゝ、しかもこゝから弘願招喚の聲を聞きとらうとした、困難な企てに基くものといふべきであらう。謂ふところの示觀の領解とは、要するに『觀經』に於ける草提の回心の事實を指すものとみられるのであつて、それは師に於いて次の如く考へられてゐる。

草提は示觀緣の「汝是凡夫。心想羸劣不能遠觀。諸佛如來有異方便命汝得見。」なる告命によつて、「正しく凡にして聖に非」ざる眞實の自己を自覺する。このとき草提ははじめ『觀經』開説の佛意を領解して淨土の救ひを體驗し、この體驗に即して新しく『觀經』の定散諸善をみなをしその價値を再發見する。換言すれば、國妃としての最高の榮譽を擔ひ自我の尊嚴を内に誇つた會つての草提に於いては、定散は飽くまで草提自身の全自我を擧げて對決すべきものであつたが、いまや淨土一實の機

として新しく生れ變つた章提にとつては、定散は最早章提の自己に於ける實踐を要求するものではない。それは正しく「汝をして見せしむることを得しむ」べき他力異方便としての定散であつたのであり、「定散の諸功德は皆彌陀なりと知つて、弘願に相應す」べき新しき使命をもつたものである。つまりこの經の定散は「諸法の理一切の功德皆彌陀佛の願成の相なりと知れば、遂に弘願の體に歸す」べきものとして、本質的に阿彌陀佛の價值内容であつたのであり、従つてそれはそのまま阿彌陀佛の功德を照し顯さんが爲の衆譬にすぎなかつたのである。善導が『玄義分』釋名門に「觀」を以つて「照」と理解し、「彼の彌陀の正依等の事を照す」といはざるを得なかつた所以はこゝにある。さればこの經の定散は、章提の示觀領解を通していまや全く新しい意味をもたしめられることゝなつた。かくして定散二善の新らしき意味を領解せる章提自身の「若佛滅後諸衆生等。濁惡不善五苦所逼。云何當見阿彌陀佛極樂世界。」の請問によつて開示せられたものが正宗分十六觀の經說であるから、それはまた當然右の如き意義使命をもつものでなければならぬ。章提の示觀領解の内容はそのまゝ我々の三心領解の意味内容に外ならない。従つて示觀領解せ

る章提に於いて定散の價值轉換が體驗せられたと同じ立場に於いて、三心領解せる我々にあつても亦新たな地平が拓かれて「無行不成」の自由なる世界が展開する。しかも心領解前の舊き世界も心領解後の新たな地平も、共に同じく定散二善を以てその内容とするものと考へられてゐることは、上來の所論をかへりみ、また師がこの經を能請・自開の両面から理解して、「一經の意二門に分れたり。章提請を致す意に依れば行門也。一代の諸經と同じ。佛自ら三福を開きたまふ本意は、觀門を開きて弘願を顯さんが爲也。此心に依らば觀門也。今淨土宗は此れに依る」といふことによつて明らかるところである。にも拘らず一は自力として退けられ一は他力として迎へられる所以のものは、まつたくもつて我々の「心の開不開」によるといはねばならない。實に新舊兩世界の境界を劃するものは章提にあつては示觀領解の一心であり、我々に於いては領解の三心である。「自力なるときは一切の善根はみな雜行と云ひ、他力に歸する上には一切の善を皆正行といふなり」といひ、又「解は行を淨む」といふ所以である。我々はこゝに於いて三心領解といはれる信心こそ定散諸善の價值轉換の唯一の契機であり、従つてそれは師の行成論の原理的立場を形成する事

實を明かに確かめることが出来る。つまり信心はこの場合定散諸善の本質的な價値の發見を意味するものと考へられるのであつて、定散の本質的價値とは一善一法のそのまゝが阿彌陀佛の價値内容として、阿彌陀佛と直接せる絶對善そのものであることを意味する。かくてこそ我々は信を通してかくの如き定散の本質的構造を新しく發見し、一善一法のすべてが阿彌陀佛と直接した絶對價値をもつ所以を領解して、無行不成の自由にして廣やかな行成的實踐にすゝみゆくのである。師の行成論の主張が世・出世の一切善を他力念佛行として肯定し、極めて現實的な實踐をかゝげて潑刺として無限に展開するは、極めて自然であるといはねばならない。しかもかくの如き行成的實踐のなるとならざるとはそのまゝ得果の勝劣を決定する要因として考へられてゐるものゝ如く、『觀經』に九品階降を説くは全くこれによると理解せられてゐる。こゝに於いてその宗教生活は一面には證得往生の安らぎに裏づけられつゝ、しかも一面不斷の緊張を以て行成的實踐に精進することにより、よりよき當得往生を要期するといふかたちにて於いて形成せられ、宗教的實踐がいよゝゝ以て世間的實踐と相即せざるを得ないこととなる。我々はこゝに師の行成論の積極的な現實實踐

的構造をみてとるとともに、同時にこゝにこそそれが淨土教的限界を逸脱せんとする大きな危機を孕むものであることを見通すことが出来ないのである。

かくして我々は一度三心領解すればこのとき即便往生してゆるぎなき證得往生の確信のもとに、新たなる生の充實がもたらされ不斷の緊張が内にみなざる。新らしき生はいまやこれを妨げる何物もない。眞の意味に於ける無礙の行者として、一善一法のそのまゝがよりよき當得往生への輝かしい希望と歡喜に裏付けられる。三心既に具しぬれば行として成ぜざるはない。淨土の行人としての我が行く手を阻む何物もない。身に行じ、口に稱し、意に憶ふところすべてこれ眞如阿彌陀佛の功德の顯現たらざるはなく、それは悉くが念佛行の一環である。従つて我々は自己の日常的生活そのものゝ中に「淨土に生れて爲す可きを、且つ且つ穢土にても習ひ修めて、惡をば退き善には進む」といつたよりよき證果を期する「正行増進」の日常に押し出される。かくして我々の前には自由無礙にしてしかも淨土の行といふ明確な方向をもつた、充實せる現實實踐的な宗教生活が展開する。従つてかくの如き現實的宗教實踐の範圍は殆んど無限である。淨土教に規定する信仰生活の行儀をはじめ、佛教一般が教へ

る實踐行の如きは勿論、廣く社會一般との接觸まですべ  
てが念佛行と轉成せられる。正義に與する社會惡とのた  
たかひ、積極的な社會への奉仕、よりよき社會の建設、  
平和的世界の實現への努力等々一切が念佛行の内容とし  
て、自力をはなれた他力行と成せられる。つまり師の行  
成論は我々の現實的な日常活動がそのまゝ捨此往彼の宗  
教行として、宗教的實踐が社會的實踐と相即し念佛行が  
社會的倫理的實踐の原理として、又指標として積極的に  
組織づけられた、稀にみる淨土教學であるといはねばな  
らない。

- 註① 『散善義觀門義』西全三の三五四  
 ② 『散善義他筆鈔』西全五の一四八  
 ③ 『玄義分他筆鈔』西全四の三〇六  
 ④ 『禮讚觀門義』西全三の四二〇(いまは西教寺本によ  
る)拙稿「往生禮讚假名書觀門義について」西山學報第  
十號參照)
- ⑤ 『散善義他筆鈔』西全五の一四八  
 ⑥ 『觀經疏大意』法然聖人門下の教學附錄九八・一〇二  
 『玄義分觀門義』西全三の一〇二『散善義觀門義』西全  
三の三四三等  
 ⑦ 『散善義他筆鈔』西全五の一四一  
 ⑧ 『散善義觀門義』西全三の三四二  
 ⑨ 右に同じ

- ⑩ 『散善義他筆鈔』西全五の一八  
 ⑪ 『右』同『西全五の一三一』『玄義分他筆鈔』西  
全四の三四〇  
 ⑫ 『散善義他筆鈔』西全五の一八『玄義分他筆鈔』西  
全四の三〇七  
 ⑬ 『觀經疏大意』法然聖人門下の教學附錄九九  
 ⑭ 『玄義分他筆鈔』西全四の二四四  
 ⑮ 『禮讚觀門義』西全三の四二三  
 ⑯ 『右』同『西全三の四四六  
 ⑰ 『散善義觀門義』西全三の三三九・三四三『散善義他  
筆鈔』西全五の一四〇等  
 ⑱ 『定善義觀門義』西全三の二〇八  
 ⑲ 『散善義觀門義』西全三の三五二  
 ⑳ 『右』同『西全三の三五四  
 ㉑ 『定善義他筆鈔』西全五の九一  
 ㉒ 『選擇集密要決』西全二の一八八・二四一『觀經疏大  
意』法然聖人門下の教學附錄九五『玄義分觀門義』西全  
三の九六『禮讚觀門義』西全三の四一九  
 ㉓ 『女院御書』上の二二『白木念佛法語』西山國師御法  
語五三  
 ㉔ 『觀經疏大意』法然聖人門下の教學附錄九〇・九九  
 『序分義觀門義』西全三の一七八『觀念法門觀門義』西  
全別卷一の八六『觀經秘決集』西全一の九一・四三九等  
 ㉕ 『觀經秘決集』西全一の三〇八・三〇九  
 ㉖ 『散善義觀門義』西全三の三二六

- ⑳ 『曼荼羅註記』西全二の一七三  
 ㉑ 『序分義』三四  
 ㉒ 『定善義觀門義』西全三の二七八  
 ㉓ 『玄義分觀門義』西全三の一〇二  
 ㉔ 『右』同『西全三の四〇』  
 ㉕ 『右』同『西全三の四六・一一〇』  
 ㉖ 『右』同『西全三の一〇九』  
 ㉗ 『玄義分觀門義』西全三の一〇九『定善義他筆鈔』西全五の九〇參照  
 ㉘ 『西山國師御法語』三七、又「念佛一行を修するも雜行雜修なる人あるべし、萬善萬行を勵むも專修正行なる人あるべし」(同上)といふもの參照  
 ㉙ 『散善義他筆鈔』西全五の一〇八・一八六『散善義觀門義』西全三の三二四  
 ㉚ 『定善義觀門義』西全三の二〇八  
 ㉛ 『鎮勸用心』西山國師御法語五二

## 四

翻つて親鸞聖人の眞宗に於いては、この問題はどうかであらうか。眞宗にあつては上にも一言せる如く幾度か廢立を以て先とせるところであつて、この比類なき批判精神の高揚こそ、實に眞宗的世界形成の原理であるといつ

てよい。従つて眞宗教徒の信仰は、常に内面的に自己自身に沈潜することによつてその純粹性が保持せられ、強調せられ來つたのである。眞宗に於いて、常に眞實なるものをたゞ如來廻向の念佛のみに認め、その他のすべてを人間的な奸詐と邪義にけがされた雜毒虚假の行として、きびしく否定する所以はこゝにある。従つてこゝでは、證空師のいふ如く「三心既具無行不成」と簡單に論じ去ることは出來ない。若しも我々にして信を契機としてかくも鮮かに轉身することが出來るとしたならば、他力の救ひは最早不要であらう。我々は寧ろ信を介して生れ換るところか、逆に却つて根源的な罪障につながる自己に直面する。従つてかくの如き我々に於ては、たゞ廻向の御名のみが眞實であつて信心を契機とする現實的活動とか、世間的實踐にはたなき出でる生れ變つた自己とかいふが如きは、思ひもよらないところであらう。かくの如く我々の自己が根柢的に罪惡深重であり、虚假不實であつて、小慈小悲もなく、従つて有情利益的實踐から遠くかけはなれた存在であればこそ、淨土教の歴史は形成せられたのである。さればかくの如き我々に於いて、現實的な世間的實踐を實踐するが如きは本來望まらるべくもなく、又これを以て宗教的實踐の本義であるかの如く

考へるとしたならば、それこそ思ひ上りも甚だしいものといはねばならない。従つて、こゝでは宗教的實踐といへば、出世間的な實踐が強く主張せられて、ともすれば世間的な現實的社會的實踐の問題に對しては、臆病になり、消極的であり、更に否定的でさへあつたのである。然しながらいかに廢立精神に鋭敏であらうとも、信の純粹性が強調せられやうとも、それなるが故に我々の現實的實踐が消極的であつたり、否定的であつたりしてよい筈はあるまい。特に淨土教徒であるからといふ理由によつて、我々に自然の欲求のまゝに行動することが許される道理はあるまい。又眞宗教徒には、信心のみが強調せられて出世間的な實踐が實踐せられるならば、世間的な現實的實踐は不要である筈はない。我々の宗教生活は、それが眞實である限り單に一方的であつていゝ筈がなく、それは一面に於いて個人的内面的な出世間的實踐をもつと共に、又一面、社會的外面的なる世間的實踐をも伴はなければならぬ筈である。然りとすれば、一方に於いては虛假不實として常に危機に臨む我々にして、しかも亦他方に於ては社會的歴史的存在として、スムーズな社會實踐が營まれなければならないといふ自己矛盾に對して、我々はどのやうに考へてゆくべきであらうか。

こゝに於いて我々が見遁してならないことは、他力信心の根本構造である。他力の救ひは確かに堂々と社會實踐を實踐し得る能力をもつものには必要ではなからう。念佛はすべての人間的行爲につかれ果てて、爲さんとして爲すことの出来ないものへの救ひであつた。墮ちるものこそ救はれるといふ、いはゞ逆説的構造をもつものであつた。こゝにこそ他力信仰の本質的な構造がみられる。我々はかくの如き信の構造に於いて永劫に救はれ難き自己の眞實に直面する。しかもかくして直面せる罪濁の自己自身こそそのまゝ無蓋の大悲と直接せる自己であつた。即ち信に於いて見出された危機的な自己は、その危機性の故にこそ大悲に抱きとられる。かくしてこゝに新しき攝取不捨の世界がひらかれて、如來との共同の生が體驗せられる。我々は新たにひらかれた攝取不捨の世界を通して、虛假不實な自己のそのまゝが、また永遠にながる自己であることをしらしめられる。信心とは善導が指摘する如く、それは現在の危機的な自己がそのまゝ永遠の上にあることの自覺であり、従つてそれは虛假なる自己の存在性に對して賦與せられた新らしき生の地盤の自覺である。とすれば、信に於ける我々は一面に於いては虛假不實であると共に、又一面に於いては虛假不實

なるまゝ如來につながる自己として、そこに我ならざる如來の力が感得せられてゐる筈である。されば『觀經』には、第八像觀に「諸佛如來是法界身入一切衆生心想中」と説いて、如來は法界身なるが故によく虚假不實なる衆生の心想の中に入ると示し、この故にこそ次の第九眞身觀には「念佛衆生攝取不捨」と地獄一定の我々をつむ大悲の佛心が具體的に顯示せられる。蓋し攝取不捨なる淨土教的救ひは、よく衆生心想の中に入つてこれと相即する法界身によつて成立するものといはねばならぬ。この故に善導はこゝに三緣釋を語り、如來と衆生との彼此三業の不相捨離を以て攝取不捨の體験的世界をあらはにし、疊戀また木火の喩を以てこれをたくみに喩説するのである。されば我々の救ひは現在の地獄一定なる自己も同時に永遠なる如來につながり、眞實なる如來につままれるといふ意味でなくてはならない。これなればこそ不實虚假なる自己にも救ひが體験せられる所以がある。若しも人間が永劫に虚假不實としてのみ止まつて、些かも眞實につながり如來につままれることがないとしたならば、我々は一體どこで救はれるのであらうか。救ひが眞實である限り、地獄一定として如來と斷絶せる我々も亦そのまゝ永遠なる如來に連續するといふ一面がな

くてはならない筈である。さればかくの如き非連續の連續をみつけることこそ信心であるといふことが出来る。つまり信心とは地獄一定の虚假なる我々の現存在に對して、如來との共同の生の自覺を興へ、新たなる生命の地盤をもたらずものであるといつてよい。この故に信心の行者は曠劫來流轉のまゝ正定聚の行人であり、「等正覺」として「便同彌勒」と稱揚せられ、「諸佛等同」の自覺を興へられる。かの『愚禿鈔』に「本願を信受するは前念命終なり。即ち正定之數に入る。即得往生は後念即生なり。即時必定に入る。又必定の菩薩と名くる也」といひ、更に「入出二門偈」には「煩惱を具足せる凡夫人、佛願力に由りて攝取を獲。斯の人は即ち凡數の攝に非ず」といふ。即ちこゝでは、信心の行者として正定聚に住することが、そのまゝ往生を意味するのものと解せられ、このものは必定の菩薩として既に凡數の攝を離れるといはれてゐる。

かくして我々は信心に於いて、我ならざる如來の力が我に於いて生々としてはたらく事實を體験感荷するが故に、又不實なる自己にも、そこに無限なる如來のはたらきが認められなくてはならない。光をうけるものはまた光を發する筈であり、染香人のその身には、馥郁たる香

氣がたゞよう筈である。「佛の捨てしめたまふ者は即ち捨て佛の行ぜしめ給ふ者は即ち行ず<sup>⑧</sup>」るといはれる所以はこゝにある。こゝでは信心に於ける一つの轉換が體驗せられてゐることは確かである。證空師が「三心既具無行不成」の『疏』文に基いて「解は行を淨む」といひ、淨土に生れて爲すべきを且つ穢土にても習ひ修むべきものと主張する所以のものも、その特殊な教義構造に基く必然的な展開であるとはいへ、原理的には信心に於ける轉換の體驗に立つものであることは、上に我々の指摘したところである。親鸞聖人に於いてもその原理的立場は全く同様であるといつてよい。そこには、信心に於ける如來との親近感、乃至は如來との一枚の生の體驗に基く如來の力が、積極的に把握せられてゐると考へられる。宗祖が信心の行人には現生に於いて十種の益が體驗せられるといひ、その第三に轉悪成善、第七に心多歡喜、第八に知恩報德、第九に常行大悲の諸益を數へてゐることは、特に注目せられなければならない。即ち我々は常に虚假不實なる自己をいざぎつゝも、特に信を介してかくの如き現實的生のうちに轉悪成善、心多歡喜の諸德につゝまれつゝ、知恩報德の自行と常行大悲の利他行に押し出される。そこには我々に於いて働く如來の力――

舊來の自己には全く感ぜられなかつた――が生き／＼と感得せられてゐる。さればこそ宗祖はかくの如き現生の諸益を結ぶに特に救ひの體驗の最も現實的な表現たる入正定聚の益を以てし、これを以て願作度生の大菩提心に裏付けられた金剛心の行人<sup>⑨</sup>であり、眞の佛弟子であるとせざるを得なかつたのである。謂ふところの眞の佛弟子とは何であらうか。恐らくそれは現生正定聚の體驗を基盤とすることに於いて教主釋尊の御跡につゞき、その具體的な宗教活動の再現實踐を期する自覺と決意に生きるものゝ謂ひであらう。かくして我々は信心を契機として最早「凡數の攝」を離れた正定聚の行人として、又「必定の菩薩」として、釋迦諸佛の御跡につゞく眞の佛弟子の地位におかれるのである。この故に我々の宗教生活は、我ならざる如來の名に於いて極めて豊かに推進せられてゆく。としたならば、我々の宗教生活は單に出世間的な一面のみにとどまらず、又進んで世俗一般と強力に結びつく、世間的實踐への必然的な展開を認めることは、強ち無理ではあるまい。我々はこゝにこそ淨土教的信仰の現實生活一般への、積極的な媒介契機をみる事が出来る。蓋し信心に於いて人は二面の意味をもつと考へられる。即ち一は虚假不實としてどこまでも墮ちゆく



自己であり、一は不實にして而もそのまゝ永遠に連続する自己である。この墮ちる自己と永遠につながる自己とが一つに保たれるところ、そこに眞の淨土教的人間がある。しかもかくの如き自己は、「超世の悲願きゝしより、われらは生死の凡夫かは、有漏の穢身はかはらねどこゝろは淨土にあそぶなり」といふ如く、舊來の自己に於いては全くみられなかつた新たな發見であり、信心に於ける轉身である。されば不實なる自己に於ける實踐は、飽くまで念佛一行の他にはない。けれども又一面、永遠に連続し佛につながる自己は、正定聚の行人としてかの釋迦諸佛の御跡につゞく眞の佛弟子として、利他大悲行の社會的實踐に推進されてゆく。我々の宗教生活はこの両面をもつことによつて具體的に形成され、豊かに盛り上つてゆくものと考へられる。證空師ならずとも信は一つの轉換をもたらすことは確かである。我々が上來注意せる現生十種の益や、眞の佛弟子の自覺等に見られる宗祖の體驗は、いづれもこの信心に於ける轉換を根柢とするものであつて、それなればこそそれは我々の現實的生の場に於いて強調せられて、我々の宗教的實踐の根柢的基盤を形成してゐるのである。かの『末燈鈔』・『御消息集』等の隨所にみられる、造惡無碍や本願ぼこりを

誠めた宗祖の切々たる法語消息には、眞實の信仰の世俗一般への必然的な媒介が積極的に表現せられてゐるのであるが、それらは何れも信心に於ける轉換の體驗の上に打ち立てられた、淨土教的實踐の根本構造を示すものにほかならない。又更に『尊號眞像銘文』の善導の銘の釋下に、稱佛六字の稱名を以て、即懺悔、即發願廻向とするに止らず、すゝんで莊嚴淨土の行に擬するものは、<sup>10)</sup>我々の念佛生活の無限なるひろがりに対して、積極的な暗示を投げかけるものといつてよからう。我々はこゝに、信心に於いてすべての人生的なるものに死んで新たによみがへつた親鸞聖人の新生の息吹を感じると共に、宗祖にあつてもその世俗的、世間的實踐の基底が、全く信心に於ける轉換の體驗に求められてゐる事實を、いよゝゝ以て確かめることが出来る。

然しながらかくいへばとて、新たにひらかれた新生の世界が、直ちに淨土教的世界の限界を超えらるといふのではない。この故にかの『歎異鈔』には「信心さだまりなば往生は彌陀にはからはせまいらせてすることなれば、わがはからひなるべからず。わろからんにつけてもいよゝゝ願力をあをぎまいらせば、自然のことはりにて柔和忍辱のこゝろもいでくべし」といひ、又我々が上にとり

あげた『信卷』眞の佛弟子の釋下には、第三十三觸光柔輒の願文をかゝけて、斯ふした親鸞の宗教的實踐の一切が「自然のことはり」として、「他力自然」の徳として、「柔和忍辱の心」所謂柔軟心を基盤として推進せられるものであり、釋迦諸佛の御跡につゞく眞の佛弟子の實踐も、所詮これを出でない所以を明らかにしてゐるのであつて、こゝにこそ宗祖に於ける宗教的實踐の限界が示されてゐることは、注意せられなければならない。即ち自己自身の、うちにつながる根源的不可避的な人間罪濁の歴史を眞直ぐに凝視しつゞけた宗祖にとつては、理論的には信心を介して新たな地平がどれ程無限にひらかれやうとも、そこには常に一定の限界が自覺せられてゐるのであつた。この限界の自覺こそ宗祖をして人間の埒外に超えんとする思ひ上りの一切を止めしめ、他力自然のことはりに於ける柔和忍辱の心をその基盤とした、謙抑な淨土教的實踐へとすゝましめたのである。宗祖の所謂自然法爾的世界はこゝから展開せるものと考へられる。従つて宗祖にあつてはどれ程ひろやかに世間的實踐がいとなまれやうとも、最早これによつて當來の證果に對して何事かを加へやうと期待するが如きことはまつたく考へる餘地はなかつたのである。我々はこゝにこそ親鸞的

實踐の本質的特性が輝くことを、證空師の行成論をかへりみて特に注意しなければならない。

- 註① 『散善義』四
- ② 『定善義』二五
- ③ 『論註』上二二
- ④ 『末燈鈔』第三章第七章等
- ⑤ 『愚禿鈔』上九
- ⑥ 『入出二門偈』終り
- ⑦ 『散善義』四
- ⑧ 『信卷』御自釋二九
- ⑨ 『同右』御自釋三〇
- ⑩ 『同右』御自釋三一
- ⑪ 『帖外和讃』
- ⑫ 『銘文』本一一
- ⑬ 『歎異鈔』第一十六章
- ⑭ 『信卷』御自釋三一

## 五

かくして宗祖に於ける實踐は、柔軟性に裏付けられた無義の義、無作の作として、一切の當爲や規定や義務の觀念を超えた、自然法爾的世界として形成せられていたのであるが、更に覺師・蓮師を通してさうした實踐の一切が、佛恩報謝の行爲として明確に規定づけられることによつて、親鸞的實踐の本質的性格は、最も巧みに又最も效果的に顯示せられることゝなつたのである。元來、報恩の行業のまことのすがたは、如來のよしと思召すことを實踐するの謂ひであつて、それは如來の行を行じ、如來の爲さしめ給ふところを行ずるといふ意味をもつものである。従つて我々の信を契機として我々の内に

働らく行は、如來の徳の全現であり、我々の個々の實踐は同じく如來の徳に直接するものと考へてよい。としたならば我々の現實的な宗教活動は、そのすべてが如來の功德の表現として、如來のよしと思召すところとして、無限の廣さと深さをもつことゝならう。こゝに於いて我々の佛恩報謝の行爲は、單に稱名のみならず、すゝんでよりよき自己、よりよき社會を建設せんとする一切の善なる行爲にまで及んでよい筈である。従つて親鸞教徒の現實活動の範圍は殆んどその限界がなく、こゝにこそ眞の意味に於ける必定の菩薩としての、又眞の佛弟子としての新しき誕生がある。勿論蓮師の表現にあつては、報恩の行業といふことは特に稱名に於いて強調せられてゐること周知の如くである。従つて佛恩報謝の行爲を以てかくの如く多含にみることは、蓮師の表現に隨ふ限り必ずしも正鵠を得たものではないかも知れない。然しながら蓮師が「稱名念佛すべきものなり」といひ、

「念佛まうすべきものなり」<sup>(2)</sup>といふとき、その「稱名念佛」なる表現の内容は、單に文字通りの唱名のみ限定せられるものではなく、廣く我々の宗教生活全般を含む

ものであり、従つてそれは極めて廣いひろがりをもつものと考へられないであらうか。つまり蓮師にあつては、

我々の信仰生活全般が廣く淨土教的信仰の一般的立場を包括的に標示する「稱名念佛」といふ表現によつて示されてゐるものと考へてよいと思ふ。このことは蓮師が常に民衆の中にあつて民衆と共に生き、その生涯を賭して宗教教學の民衆化平明化を企圖した事實を顧れば、さして困難もなく理解せられるところであらう。蓋し蓮師は、淨土教的實踐の一切を擧げて「稱名念佛」又は「念佛申す」といふ用語に於いて表現することにより、當時の文化にかけはなれた非教養的な民衆と宗教教學とを直結せしめたものと考へられる。我々はこゝに蓮師が自ら「何事をも當機をかゞみおぼしめし、十あるものを一にするやうに、かろん」と理のやがて叶ふ様に御沙汰候<sup>(3)</sup>といひ、又かの『山科連署記』が「千の物を百にゑり、百のものを十にゑり、十の物を一にゑりすぐりて、凡夫直入の金言を撰み、いかなる者も心得、やがて信をうるやうにあそばし候<sup>(4)</sup>」と適評した蓮師教學の表現に於ける本質的な特色をみるものである。若し然りとすれば、特に「稱名念佛」に於いて表現せられた蓮師の報恩の行業の範圍は無限であるとみることが許されてよいであらう。この意味に於いて「南無阿彌陀佛にもたれたる」とか、「南無阿彌陀佛に身をばまらめられたる事なり」と

かのかたちにて於いて攝取不捨の救ひを體驗し如來と一枚になりきつた蓮師が、この體驗的立場に於いて「いよいよ冥加を」<sup>⑧</sup>仰いで、こゝから「御膳を御覽じても……たゞ御恩の尊きことをのみ思召」<sup>⑨</sup>し、「萬事につけてよきことを思ひつくるは御恩なり。悪しきことだに思ひすてたるは御恩なり。捨てるもとるも御恩なり」とか、「佛法のうへは何事も報謝と存すべきなり」と、廣く人間の行爲の全般を感恩報謝行の枠内に於いて理解せるものは、この場合特に我々の見通し得ざるところである。しかも蓮師にあつては、上述の如く感恩報謝の信仰生活そのまま、特に「稱名念佛」に於いて表現せられることによつて、頗る簡結に示されてゐると考へられるところであつた。こゝに於いて蓮師教學に於ける「稱名報恩」なる教條の内包は、言葉の約束を超えて限りなき廣さをもつものとして、我々の現実活動のすべてを包むことは最早疑ふべくもない。況んや既に稱名といひ念佛といふこととそれ自體が、かの聖光房辨阿師<sup>⑩</sup>もいふ如く、「不離佛值遇佛」として眞實なる如來との共同の生を營むものゝ體驗的標示に外ならないものと考へられるのであるからこの意味に於いても我々の念佛生活は、限界をもたないといはねばならない。蓮師が「當流には總體世間機

わろし。佛法の上より何事もあひはたらくべきことなるよし仰せられ候<sup>⑪</sup>」といひ、「佛法をあるじとし世間を客人とせよ。佛法の上より世間のことはときにしたがひ相ひはたらくべき事なり」と示し、又特に「たとひ牛盜人とはよばるとも、佛法者後世者とみゆるやうに振舞べからず。またほかに仁義禮智信をまもりて王法をもてさきとし、内心にはふかく本願他力の信心を本とすべきよし」を、開山聖人のさだめおかれし御掟<sup>⑫</sup>のむね」として教へるものは、我々の念佛生活の無限性を示すものであり、それはそのまま「稱名念佛」の限りなきひろがりや物語るものであると考へられる。

しかしてかくの如き無限なるひろがりをもつ念佛の實踐は、それが報恩の行爲であることに於いて現に行じつつあるものが我であるにかゝはらず我行するの思ひをはなれ、我をして行ぜしめ給ふ如來のおんはからひのみが感荷せられてゐる。この故に眞宗教徒の實踐は我が行じつゝ、しかも我ならざる如來の力がその全面に躍動してゐる。そこにはいさゝかの停滞もなく、當爲もなく、限界もない。爲さずとも敢て支障のないところに、力の限り盡して爲さずにはおられないものが感ぜられる。凡そ一切の行爲のうちでこのような力強き純粹な行爲がま

たとあるであらうか。まことに「念佛者は無碍の一道」である。

論じてこゝに至れば、眞宗的念佛の内包はかの證空師の行成論に基く豊かな念佛論を彷彿たらしめるものすらあるのであるが、しかも宗祖や蓮師にあつてはそれが特に柔軟心に於いて語られ、又佛恩報謝行として表現せられざるを得なかつたところに證空師の行成的實踐を鋭くほり下げた、眞の意味に於ける淨土教的實踐が組織づけられてゐることを見遭してはならない。

- 註① 『御文』三の三、五の一 ⑪ 淨土宗鎮西流祖應保二一曆仁元(一一六二—一二三八)
- ② 『右同』五の一六
- ③ 『御一代記開書』七〇
- ④ 『山科運署記』四
- ⑤ 『御一代記開書』一〇一
- ⑥ 『右同』一〇〇
- ⑦ 『右同』同
- ⑧ 『右同』二六七
- ⑨ 『右同』二九六
- ⑩ 『右同』一三七
- ⑫ 『徹選擇本願念佛集』淨全七の一〇四・一〇六
- ⑬ 『御一代記開書』九六
- ⑭ 『右同』一五六
- ⑮ 『御文』三の一
- ⑯ 『こゝにいふ「王法」とは人間の社會的秩序と解される。』
- ⑰ 『歎異鈔』第七章

六

捨此往彼を理想とし厭穢欣淨を基盤とする淨土教に於

いて信仰の積極的な世俗的媒介といふ困難な問題に對して、證空師の如く強力な教義的根據を大膽に與へ得た人師が法然門下に存在した事實は、正に特筆されてよい。まことに師の行成論は個人の救済得脱を以て目的とし、ともすれば内面的な現實否定の實踐にのみはしつて信仰生活の社會的なつながりを忘れがちな信仰の世界、特に淨土教的世界に於いて、この問題を極めて積極的に組織づけた一點に於いて、その功績は高く評價せられるべきである。勿論師の教學が餘りにも行成開會の一邊に過ぎて極端に樂天的な實踐論を強調する結果、兎もすれば淨土教的限界の埒外に逸せんとする危険を孕む事實は、すでに師の門流に於いてすらこれを指摘するところである。①、我々も亦上に既に言及したところである。然しながら師がその行成論に於いて示した大膽なもの考へ方、積極的な社會實踐への志向性の如きは、廣く淨土教徒一般に對して好個の示唆を與へその反省を促すに足るものがあると信ずる。我々がこの小論に於いて特に師の教學をとりあげた所以はこゝに存する。

以上、我々は淨土教特に親鸞聖人の眞宗に於ける世間的、社會的實踐の教義的基礎付けを企て、その一つの方法として先づ證空師の行成論をとりあげ、それが淨土教的

現實實踐の問題に對して極めて積極的な教義構造をもつ事實を指摘した。而して所謂行成論の基底的立場は信心に於ける轉換の體驗の積極的な把握——それは師の特殊な『觀經』理解に基く教義の必然として導き出されたものであつたが——に求められてゐる所以をも指摘したところである。かくして我々はこれに大きな刺戟と示唆とを與へられて、當面の主題たる眞宗教學に於けるこの問題を一瞥した。それは文字通りの一瞥に過ぎないものであつたが、これによつて我々は親鸞聖人に於いても、特に信心に於ける救ひの現實的體驗を立場として、そこに一つの轉換乃至は轉身が積極的に認められ、強調せられて、そこから宗教的現實實踐が導き出されてゆくものと考へられてゐた事實を跡づけ得たと思ふ。而してそれは蓮師に來つて特に「稱名報恩」なる教條に於いて更に一層日常化し具體化するところであつた。しかも宗祖や蓮師に於ける實踐は強く淨土教的限界の自覺に裏づけられたものであつて、それは證空師の如き學解的理想的な實踐論に比して常に生死の人間の現實を足場とした實踐であつた。従つてこゝにこそ我々の迷妄的現實に即する地についた、まことの淨土教的實踐が形成せられてゐる所を確かめることが出來た。謂はゞ眞宗的實踐は證空師

の行成論とその基盤を同じくしつゝ、しかもその餘りにもイージーな考へ方に對して、更に深くこれを掘り下げてこれに人間的立脚地を與へたものといつてよい。されば我々は自己自身の人間の現實を足場としつゝ、淨土教的現實實踐の問題に對して舊來の消極的な態度から一轉して、更に積極的な實踐へとすゝむべきである。最早この問題に對して臆病であつたり、懷疑的であつたり、足踏みしたりする必要はない。かくして我々はこゝから「御報恩のために御念佛こゝろにいれてまふして、よのなか安隱なれ佛法ひろまれ」と祈念する眞宗教徒の歴史に生きる意義と使命とを積極的に引き出してこなければならぬ。

いまこの小論を結ぶに當つて上來の粗雑な討究の跡をかへりみ、それが單なる試論、序説の域にとどまつて、必ずしも我々の最初の意圖に應へ得るものでなかつたこと、のみならず論じて過ぎたる危険なしとしないことは遺憾に思ふところである。眞の問題解決はこれを他日に期する次第である。(二六年一〇月)

註① 『選擇集秘鈔』淨全八の三五九

② 『御消息集』第二通